

自然遊学館 だより

1997冬 (No. 11)

1997. 2. 01

シリーズ『貝塚の昆虫(9)』

貝塚市内でビロードハマキを採集

貝塚市民の中にはわれわれの仕事に協力的で、貝塚市の自然に関するいろいろな資料を提供して下さる方がいる。これもその一例で、市内北町にお住いの増田久子さん(GCの運営委員)が昨年8月6日にビロードハマキの1雌を自然遊学館に持参下さった。これは7月15日頃ご自宅の庭で拾われたもので、その前夜はひどい風が吹き荒れた。早朝庭を見ると枯れ葉のようなものが落ちていた。よく見たら美しいガなのでビンに入れて置いた。20日間程そのままにしておいたらすっかりみずぼらしい姿になってしまったとのことである。

本種はビロード様の細かい模様がある美しいガで、ハマキガ科の中では大型(開張♂34~40mm; ♀40~59mm)で目立つ存在である。前ばねは黒と赤地に黄色点を散布し、後ろばねには黄色地に黒紋が散らばっている。成虫は6月と8~9月の年2回発生し、幼虫は夏にはカエデ類、秋から冬にかけてはアセビ、ツバキ、カシ類など常緑広葉樹の葉をつづつ食べている。幼虫で冬を越し、翌春再び葉を食べさなぎになる。近畿、四国、九州に分布しているが多い種ではない。このガの生息のためには、そこそこの茂みが必要で、昼間木々の上などをひらひらと飛んでいる。

持参された標本は前・後のはねとも先端1/3程が破れてはいるが、ビロードハマキ特有の模様は残っている。

ヨツモンキヌバコガの幼虫発見

昨年10月2日貝塚市民より「北町の空地の雑草(シロザ)に糸を張ったアオムシが多数発生しているので、どうかしてもらいたい」との苦情が市役所に入り、交通公害課がこれに対応し、同課のH氏が遊学館に相談にこられた。話を聞いただけでもキヌバコガの可能性が頭の片隅を過ぎたが、種を特定するためには、実物を見る必要がある。翌10月3日現地に行ってみることにした。空地から幅4m程の道を隔てたところに事務所をもつ住人の話によると、この虫は2か月位にわたり発生し、事務所の白壁に這い上り、高さ3m程の所からポタポタと地上に落ち、一部はアルミサッシなどの隙間にもぐりこみ、まゆを作ったので薬をまいて殺したとのことであった。しかし運よく道端には、食草を刈って詰めたビニール袋があり、その中から幼虫が沢山出てきて、ヨツモンキヌバコガであることが確認できた。現在この幼虫はティッシュ間にまゆを作り越冬中である。本種は珍しいという程ではないが、どこにでもいるというものではなく、欲しいからといって簡単に見つかるものではない。

このガは5、7、8~9月に発生し、はねを広

蕎原周辺で見られた鳥

去年に引き続き、今年も少年自然の家でバードウォッチングを行ないました。(1996.6.23)

朝、日の出前に自然の家の前の広場に集合して、まずは鳥の声に耳をかたむけました。この時期は、繁殖期の終わりごろなので、5月ごろのようなたくさんの鳥のコーラスを聞く、ということではできませんでしたが、明け方頃のヤブサメの虫の鳴くようなさえずりや、一日中元気にさえずり続けたウグイスやホオジロの声を聞くことができました。

自然の家から稲谷へと歩いていく間では、ホオジロやカワラヒワ、キセキレイなどが見られました。木のこずえや電線の上でさえずっているホオジロを、ゆっくりと見る人が多かったと思います。ときおり、カケスのギャーッという声も聞こえてきました。

稲谷では、去年はカワセミの美しい姿を見ることができたのですが、今年は残念ながら1度も姿を表わしてくれませんでした。また、サンコウチョウの声が聞けるかと思って、がんばってここまで歩いたのですが、これも残念ながら聞くことはできませんでした。

せっかくの機会なので、できるだけたくさんの鳥の姿を見たり声を聞いてもらえれば、という思いと、種類は少なくても、ゆっくりとその鳥たちの生きている姿を見てもらいたい、という気持ちがいちも心の中で争っているのですが、特に今回のように鳥が少ない時は、無理をして遠くまで歩いていただくよりも、もっと近くをゆっくり歩いて、鳥と、鳥を取り巻いている自然を見てもらった方が良かったのではと、皆さんに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

げて12~15mmの小さな黒っぽいガであるが、季節により斑紋が異なる。春のものは黒一色であるのに、夏~秋の個体は前ばねの基部と先端部に黄紋があるので、昔は別種と考えられていた。幼虫は6~7, 8, 9~10月の3回出現し、シロザの葉や種子上に糸を張り食べる。今回シロザのほか空地に一緒に生えていたシロザと同じ属のケアリタソウの種子をも食べるのが見つかった。これは新食草になることと思う。



貝塚市で採れたピロードハマキ(♀)



左：春型 右：夏型

ヨツモンキヌバコガの成虫
(保育社の蛾類図鑑より)



ヨツモンキヌバコガの終令幼虫

(黒子 浩)

蕎原周辺で観察した鳥

(1996年6月23日)

科和名	種和名	区分	個体数	生息場所	その他
ハト	キジバト	留鳥	普通	街・山	
ホトトギス	ホトトギス	夏鳥	少数	山	ウグイスに拓卵
ヨタカ	◎ヨタカ	夏鳥	少数	山	6月22日夜
フクロウ	◎フクロウ	留鳥	少数	山	6月22日夜
カワセミ	カワセミ	留鳥	少数	水辺	
キツツキ	アオゲラ	留鳥	少数	山	
	◎コゲラ	留鳥	普通	山	
ツバメ	◎ツバメ	夏鳥	普通	街	
	◎コシアカツバメ	夏鳥	普通	街	
セキレイ	◎キセキレイ	留鳥	普通	水辺	
	◎セグロセキレイ	留鳥	普通	水辺	
ヒヨドリ	◎ヒヨドリ	留鳥	普通	街・山	
ヒタキ	◎ヤブサメ	夏鳥	少数	山	
	◎ウグイス	留鳥	普通	山	
	オオルリ	夏鳥	少数	山	
	サンコウチョウ	夏鳥	稀	山	
エナガ	エナガ	留鳥	普通	山	
シジュウカラ	◎ヤマガラ	留鳥	普通	山	
	◎シジュウカラ	留鳥	普通	山	
メジロ	◎メジロ	留鳥	普通	山	
ホオジロ	◎ホオジロ	留鳥	普通	山・草原	
アトリ	◎カワラヒワ	留鳥	普通	街・山	
	イカル	留鳥	少数	山	
ハチドリ	◎スズメ	留鳥	普通	街	
カラス	◎カケス	留鳥	少数	山	
	ハシボソカラス	留鳥	普通	街	
	◎ハシブトガラス	留鳥	普通	街	
キジ	◎コジュケイ	留鳥	普通	山	帰化鳥
ハト	ドバト	留鳥	普通	街	帰化鳥

本年度記録種数 19種(◎印)

印の無いものは、昨年度に記録した鳥

昨年度（27種）と本年度をあわせて、29種を記録しました。このうち、ヨタカとフクロウは、本年度初めて記録しました。

去年は全部で27種類の鳥を確認することができたのですが、今年は前日の夜のホタルウォッチングの時に、黒子先生たちが鳴き声を聞いたフクロウとヨタカを含めても、19種類しか確認することができませんでした。たった1日の観察なので、これがこの辺りの環境が悪くなったためだと言うことはできませんが、色々な昆虫や小動物たちが住むことのできる、たくさんの種類の木の茂った雑木林がもっとたくさんあれば、きっともっとたくさんの種類の鳥も見ることができたのではないのでしょうか。特に、去年も今年も、これらの生き物の頂点に立つワシタカ類が全く見られなかったのは、もしかしたらすでにこの辺りでさえ、ワシタカ類がくらすことのできない環境になっていることを示しているのかもしれませんが。

（砂川高校 中村 進）

カニ釣り大会 成績発表！！

—— 近木川河口の生き物 ——

と き 1996年10月12日（土）

ところ 近木川河口左岸

講 師 山西 良平氏

大阪市立自然史博物館学芸員

参加者 51人

天 候 晴のち雨

近木っ子探検隊の行事「河口の生き物を探る」に於いて一番の盛り上がりを見せたのが、カニ釣り大会でした。タクワンを紐の先にくくっただけの簡単な仕掛けで、もの見事にカニが釣れるのに皆おおはしゃぎでした。一番多く釣れたのはクロベンケイガニでしたが、大阪では珍しいハマガニもけっこう釣れました。この結果を大きなカニを釣った上位記録3位まで発表します。

● ハマガニ

1位	甲幅	48mm (♂)	池本昌也
2位	甲幅	46mm (♂)	白木 茂
3位	甲幅	42mm (♂)	大村あゆみ
3位	甲幅	42mm (♀)	西村静代

（全採集数16、平均 32.5mm）

● クロベンケイガニ

1位	甲幅	35mm (♂)	小野加愛
1位	甲幅	35mm (♂)	児玉享憲
2位	甲幅	33mm (♀)	松崎 瞳
3位	甲幅	32mm (♂)	長江恵子
3位	甲幅	32mm (♂)	山川二美世

（全採集数95、平均 24.1mm）

● アシハラガニ

1位	甲幅	30mm (♀)	関 康子
2位	甲幅	29mm (♂)	鈴子達也
2位	甲幅	29mm (♂)	関 信宏
3位	甲幅	27mm (♀)	関 康子

（全採集数11、平均 23.5mm）

（山田浩二）

近木川のハクセンシオマネキ《1996年調査結果》

晩秋が訪れ、気温がめっきり低くなると、夏場あれほど活発に干潟の上で活動していたハクセンシオマネキは、巣穴の中に閉じこもり出てきません。彼らがお休みしている間に、昨年の近木川河口（左岸）での彼らの暮らしぶり、生息状況を振り返ってみましょう。

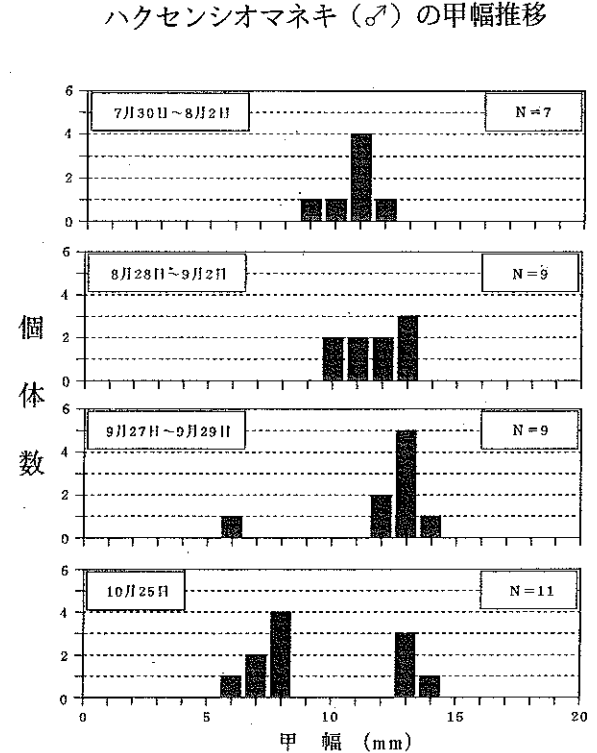
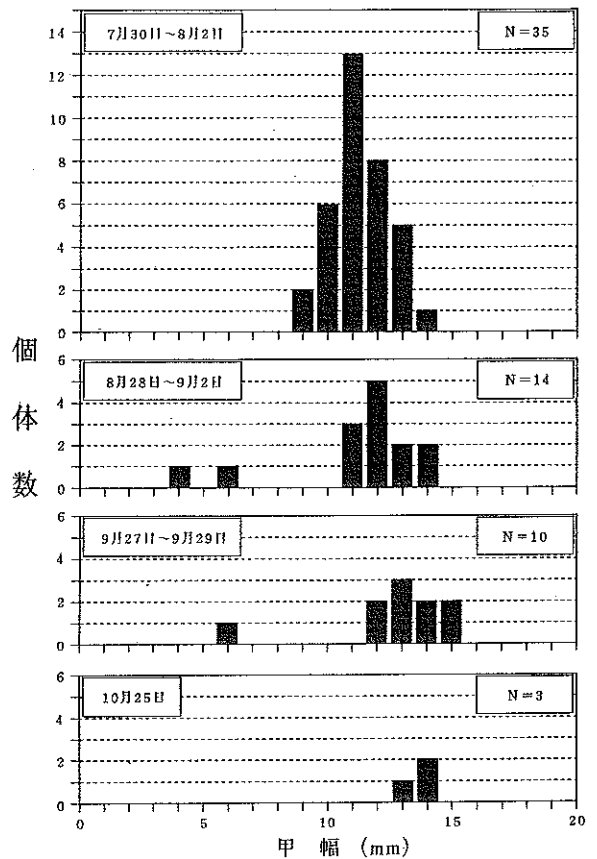
春 左岸にも生息していることがわかりましたが、1995年に生まれた小さな個体しか見つけれませんでした。成体が住むサイズの巣穴も確認できなかったため、調査地でのハクセンシオマネキは皆、同年令だと思われます。

夏 盛んに干潟の砂を摂食している様子で、毎月の甲幅測定から、カニの成長ぶりがうかがえます（右図参照）。また繁殖活動として、雄のハサミ振りダンスとともに巣孔内交尾が観察され、しばらくして雌は抱卵しました。

秋 卵からふ化した幼生は、約1ヶ月間海で浮遊生活を送った後、干潟にたどり着きカニの姿に変態します。この稚ガニは甲幅2、3mmで、まだ外見上の雌雄の違いはみられません。稚ガニはさっそく砂の摂食を始め、急速に大きくなっていきます。

このように、汚いと言われている近木川河口においてもハクセンシオマネキは順調に成長し、1996年生まれの稚ガニたちも新たに加わりました。調査場所での生息密度は、泉南市の男里川河口や和歌山市の和歌浦河口と概観して比べるとまだまだ低く、個体数は増加していきそうにみえます。しかし、やはり有機物が多いせい干潟の砂の質が泥っぽすぎてハクセンシオマネキの生息にあまり適さないのではないかとことも懸念されます。

（山田 浩二）



千石荘の直翅類

当館では、昨年(2019年)の9月21日と10月5日に、ウィークエンドレッスンとして、それぞれ「千石荘のバッタを調べる」、「千石荘の鳴く虫の声を聞く」という行事を行い、千石堀城址周辺の雑木林や田畑で、直翅類(バッタ、キリギリス、コオロギ、カマキリなど)を観察・採集しました。特に後者では、大阪市教育委員会の加納康嗣さんに、鳴いている虫の種名を教わりました。ここでは、その両日に確認された直翅類を報告します。以下の♂と♀の記号はそれぞれ、オス成虫とメス成虫を示しています。

9月21日(午後2時から:すべて採集)

直翅目

コロギス科

ハネナシコロギス 成虫1

イナゴ科

ツチイナゴ 幼虫12 + ♂3

オンブバッタ科

オンブバッタ ♂11 ♀18

バッタ科

ショウリョウバッタ ♂12 ♀4

ショウリョウバッタモドキ ♂3 ♀5

クルマバッタモドキ ♀1

トノサマバッタ ♂1

キリギリス科

クサキリ ♀2

ホシササキリ 幼虫1 + ♂1 ♀2

セスジツユムシ ♂2

コオロギ科

エンマコオロギ ♂2 ♀5

マツムシ ♂1

カマキリ目

カマキリ科

オオカマキリ 幼虫2 + ♂5 ♀14

ハラビロカマキリ ♀1

コカマキリ ♂1

10月5日(午後5時から)

直翅目

イナゴ科

ツチイナゴ 観察

オンブバッタ科

オンブバッタ 観察

キリギリス科

ホシササキリ 観察

セスジツユムシ 鳴き声 + 観察

オナガササキリ 鳴き声 + 観察

コオロギ科

エンマコオロギ 鳴き声

マツムシ 鳴き声 + 観察

カントク 鳴き声 + 観察

ヤマクダマキモドキ 観察

アオマツムシ 鳴き声

スズムシ 鳴き声

ハラオカメコオロギ 鳴き声

ツツレサセコオロギ 鳴き声

カネタタキ 鳴き声

カマキリ目

カマキリ科

オオカマキリ 観察

ハラビロカマキリ 観察

鳴く虫ではないのですが、10月5日に観察し

たカマキリは、首を切られたオオカマキリの♂がハラビロカマキリの♀の背中に乗って、交尾器を挿入していたものです。私は、これまでカマキリ類の研究をしてきて、お互いに近縁であるオオカマキリとチョウセンカマキリの種間交尾を観察したことはありますが、オオカマキリとハラビロカマキリの種間交尾を観察したのは初めてです。交尾の様子は、昆虫写真家中谷憲一さんに、写真に収めてもらいました。

(岩崎 拓)

近木川河口

バードウォッチング

と き 1996年9月22日(日)

ところ 近木川河口周辺

講 師 飯田政治氏(日本野鳥の会大阪支部)

参加者 11人

天 候 晴 強風

観察した鳥

コサギ	アオサギ
ダイサギ	ハマシギ
キアシシギ	トウネン
シロチドリ	ハクセキレイ
ササゴイ	ムクドリ
ハシボソガラス	セグロセキレイ
トンビ	ヒヨドリ
スズメ	

近木川の鳥

— 近木川ウォークに参加して —

近木川を河口部から上流部まで、鳥を中心にしてみました。この1日で38種の鳥を見ることができましたが、観察した場所ごとに気のついたことを書いてみました。

◎自然遊学館付近(11種)

集合場所の遊学館付近では、キジバトやヒヨドリといった、1年中町中で普通に見られる鳥の他に、ツグミやビンズイのような冬鳥も見られました。また、海のすぐ近くなので、ホシハジロ(カモ類)の大きな群れが飛んでいくのも見られました。

◎近木川河口部~近木川橋(23種)

近くの小さい山に登ってみると、近木川の河口部が見渡せました。山の周りでは、ヒヨドリの群れやセッカが見られました。また、河口部にある小さな干潟では、ヒドリガモが海草を食べていたり、コサギやアオサギがじっと餌の魚をねらっていました。

また、ハマシギやシロチドリも、干潟にいるゴカイや小さな虫をさがして、チョコマカと歩き回っていました。潮騒橋から海上を見てみると、最近府下ではとても増えてきているカワウや、希少種に指定されているカンムリカツブリ2羽が泳いでいました。橋を渡って上流の方に歩いて行くと、一見何もいないように見える川べりのアシ原の中で、アオジやホオジロ、ウゲイスといった鳥たちが、意外と多く住んでいることがわかりました。

◎斎場～平成大橋（13種）

福永橋付近からサギ山（巢のあと）を見ましたが、そこにはサギは全然いませんでした。この場所より少し下流側では、サギが木に10羽あまり止まっているのを、バスの窓から見る事ができました。ここから続く河畔林では、ツグミやムクドリ、ヒヨドリなどがたくさん見られました。途中、サギのフンで木の葉が白いペンキをつけられたようになっている所もありました。カワセミが飛んで行くのも見られました。

◎蕎原山荘付近（12種）

蕎原バス停から川沿いを歩きましたが、川の様子がこれまでとは全くちがひ、そのまま水が飲めそうなくらいきれいに感じました。川ではキセキレイしか見られませんでした。希少種に指定されているオオタカが2羽、山の上を悠然と飛んでいました。

また、道沿いの林では、エナガやヤマガラ、シジュウカラ、メジロなどととも、少し高い山に住むヒガラも見ることができました。

◎水間寺（11種）

寺の中では人がたくさんいたにもかかわらず、ヤマガラやシジュウカラ、メジロなどがわりと平気で群れていました。また、すぐそばの社寺林の上を、オオタカが2羽飛んでいました。周りに人家も多いこんな所でオオタカが見られるとは思ひもかけませんでした。オオタカの住める豊かな自然がずっと残っていてほしいと願わずにはいられませんでした。

今回、初めて近木川を歩いてみましたが、もっと汚れているのではという予想に反して、河口部でも意外とたくさんの鳥たちを見ることができました。でも、もし河口部にアシ原や干潟がなく、ただの水路になっていたら、水ももっと汚れていて、鳥たちもこんなに見られなかったのではないのでしょうか。

人が住んでいる以上、川を全く汚さないということは不可能ですが、川は汚水やゴミを捨てる場所ではなくて、この川で生きているたくさんの生き物にとってのかけがえのない場所なんだという意識を、少しでもたくさんの人たちに持ってもらえれば、近木川ももっと美しい川に変えることができるのではないかと思います。

<場所ごとの出現種数>

遊学館付近	11種
河口	23種
斎場～平成大橋	13種
蕎原山荘付近	12種
水間寺	11種

（砂川高校 中村 進）

観察された鳥類

近木川ウォーク (1996年11月23日)

科和名	種和名	区分	生息場所	その他
カイツブリ	カイツブリ	冬鳥	河口	希少種、河口の湾内に2羽
ウ	カワウ	冬鳥	河口	河口の湾内に1羽
サギ	コサギ	留鳥	河口	
	アオサギ	留鳥	河口、斎場～平成大橋	
ガンカモ	ヒドリガモ	冬鳥	河口	海藻?を食べていた
	ホシハジロ	冬鳥	遊学館付近	上空を群で飛んでいった
ワシタカ	トビ	留鳥	河口	
	オオタカ	留鳥	蕎原山荘付近、水間寺	希少種、いずれの地点でも2羽でいた
チドリ	シロチドリ	留鳥	河口	
シギ	ハマシギ	冬鳥	河口	
	イソシギ	留鳥	河口	
カモメ	ユリカモメ	冬鳥	河口	
	セグロカモメ	冬鳥	河口	
ハト	キジバト	留鳥	遊学館付近、斎場～平成大橋、水間寺	
カワセミ	カワセミ	留鳥	斎場～平成大橋	川沿いに1羽が飛んでいった
ヒバリ	ヒバリ	留鳥	河口	
セキレイ	キセキレイ	留鳥	斎場～平成大橋、蕎原山荘付近、水間寺	
	ハクセキレイ	留鳥	遊学館付近、河口、斎場～平成大橋、水間寺	
	セグロセキレイ	留鳥	河口、斎場～平成大橋	
	ビンズイ	冬鳥	遊学館付近、河口	
ヒヨドリ	ヒヨドリ	留鳥	遊学館付近、斎場～平成大橋、蕎原山荘付近、水間寺	
モズ	モズ	留鳥	遊学館付近、斎場～平成大橋、水間寺	
ヒタキ	ツグミ	冬鳥	遊学館付近、河口、斎場～平成大橋、水間寺	
	ウグイス	留鳥	河口、斎場～平成大橋	
	セッカ	留鳥	河口	草地で数羽が越冬しているよう
エナガ	エナガ	留鳥	蕎原山荘付近	
シジュウカラ	ヒガラ	留鳥	蕎原山荘付近	3羽
	ヤマガラ	留鳥	蕎原山荘付近、水間寺	
	シジュウカラ	留鳥	斎場～平成大橋、蕎原山荘付近、水間寺	
メジロ	メジロ	留鳥	斎場～平成大橋、蕎原山荘付近、水間寺	
ホオジロ	ホオジロ	留鳥	河口、蕎原山荘付近	
	アオジ	冬鳥	河口、蕎原山荘付近	
アトリ	カワラヒワ	留鳥	遊学館付近、河口	
ハタオリドリ	スズメ	留鳥	河口、斎場～平成大橋、蕎原山荘付近	
ムクドリ	ムクドリ	留鳥	遊学館付近、斎場～平成大橋、水間寺	
カラス	ハシボソガラス	留鳥	遊学館付近	
	ハシブトガラス	留鳥	蕎原山荘付近	
ハト	ドバト	留鳥	遊学館付近、水間寺	

遊学館で飼育している昆虫<3>

夏から秋にかけて盛んに活動していた昆虫たちも、寒い冬の到来とともに、だんだんと姿を消しつつあります。常設の3つのケージでも、オオカマキリは成虫が死んで卵囊だけになり、カブトムシは幼虫だけで土の中にもぐってばかり、バッタ類は成虫で越冬するツチイナゴを残すのみとなり、野外と同じように寂しい状態になっています。オオカマキリの雌成虫が12月の下旬までがんばって生きていたのですが、さすがに年を越すことはできませんでした。これらのケージのほかに、夏から増やしたケージで飼育していたキリギリス、ショウリョウバッタ、エンマコオロギ、スズムシ、ハラビロカマキリの成虫もすべて、冬を越すことはできませんでした。現在は、春に向けて、スズムシとハラビロカマキリの卵を、別の場所で飼育しています。

(岩崎 拓)

七草摘み

と き 1997年1月6日(月)

ところ 貝塚市名越付近

天 候 曇りときどき晴 北風ビュービュー

- ①コオニタビラコ(ほとけのぎ) ②ナズナ
③ハハコグサ(ごぎょう) ④ハコベ ⑤セリ
⑥かぶ(すずな) 大根(すずしろ)

⑥⑦は上久保館長栽培のもの

ナズナ、ハコベなどは日当たりがよいせいか花をつけているものもありました。

自然遊学館の淡水エビ

淡水エビ類にはテナガエビ科とヌマエビ科があります。これらの多くは卵から生まれた幼生(ゾエア)が一度海に下って成長し、エビの姿になってから再び川を上ります。川が汚れていたり、堰止められていたりすると、幼生が成長できずに死んでしまいます。つまり、淡水エビ類の豊富な河川は、きれいで自然な流れのある川といえます。

自然遊学館では1995年11月7日より、淡水エビ類の飼育を始めました。現在飼育しているエビは次のとおりです。

ヌマエビ科

ヌマエビ	3個体
トゲナシヌマエビ	5個体
ヤマトヌマエビ	4個体
ミゾレヌマエビ	3個体
ミナミヌマエビ	約30個体

テナガエビ科

スジエビ	3個体
テナガエビ	1個体

これらの中で貝塚市に生息しているのは、残念ながらスジエビ1種だけです。このエビは幼生が海に下らずに淡水中で成長できます。

またミナミヌマエビは幼生期を卵の中で過ごし、生まれてきたとき既に、親と同じ形をしています。このため水槽の中でも簡単に繁殖させることができます。実は、自然遊学館の水槽の中にも何匹かミナミヌマエビの子供がいます。小さくてわかりにくいでしょうが、ぜひ探してみてください。

(中谷至伸)

自然遊学館周辺の植物（秋～冬）

遊学館周辺では、冬になるとイネ科の枯れた姿ばかりが目立ちますが、よく見ると地面にはうようにして春の草花が咲いています。暖かくなると一斉に立ち上がるのでしょうか。

（帰）は帰化植物

10月展示植物

- いね科 カゼクサ・ネズミノオ・オヒシバ・
メヒシバ・ススキ・エノコログサ・
ムラサキエノコロ
- いね科(帰) メリケンカルカヤ・アメリカスズメ
ノヒエ・タチスズメノヒエ
- きく科 ヨモギ・ハハコグサ・チチコグサ・
ハルノノゲシ
- きく科(帰) コセンダングサ・セイタカアワダチ
ソウ・アレチノギク・ヒメジヨオン・
チチコグサモドキ・ヒメムカシヨモ
ギ・ヒロハハウキギク・ノボロギク
- ひゆ科(帰) ホソアオゲイトウ
- うり科 カラスウリ
- たで科 ギシギシ
- しそ科 ホトケノザ
- まめ科(帰) アレチヌスビトハギ
- まめ科 マルバヤハズソウ
- なす科 イヌホウズキ
- なす科(帰) アメリカイヌホウズキ
- あかざ科(帰) シロザ・ケアリタソウ
- かたばみ科 アカカタバミ
- かたばみ科(帰) ムラサキカタバミ
- あぶらな科(帰) マメグンバイナズナ

とうだいぐさ科(帰) コニシキソウ・オオニシキ
ソウ

とうだいぐさ科 エノキグサ

くまつづら科(帰) アレチハナガサ

ひるがお科 コヒルガオ

かやつりぐさ科 カヤツリグサ・チャガヤツリ・
コゴメガヤツリ・ハマスゲ・
クグガヤツリ

11月展示植物

- いね科 コツブキンエノコロ・エノコログサ・
カゼクサ・ススキ・メヒシバ・キンエ
ノコロ・イヌビエ
- いね科(帰) メリケンカルカヤ
- きく科 ヨモギ・ハハコグサ・ハルノノゲシ・
- きく科(帰) セイタカアワダチソウ・アレチノギ
ク・コセンダングサ・チチコグサモド
キ・ノボロギク・オオアレチノギク・
アメリカオニアザミ
- まめ科 マルバヤハズソウ
- しそ科 ホトケノザ
- ひゆ科 イヌビユ
- なす科 イヌホウズキ
- なす科(帰) アメリカイヌホウズキ
- あかざ科(帰) ケアリタソウ
- とうだいぐさ科 コミカンソウ
- とうだいぐさ科(帰) コニシキソウ
- かたばみ科 アカカタバミ
- かたばみ科(帰) ムラサキカタバミ
- あぶらな科(帰) マメグンバイナズナ

12月展示植物

[草もみじ]

オオニシキソウ・コニシキソウ・コマツヨイグサ・
アレチマツヨイグサ

きく科 ヨモギ・ハハコグサ・ハルノノゲシ
きく科(帰) ヒメジョオン・アメリカオニアザミ・
コセンダングサ・チチコグサモドキ
しそ科 ホトケノザ
なす科(帰) アメリカイヌホウズキ
あかね科 キクムグラ
なでしこ科 ハコベ
なでしこ科(帰)オランダミミナグサ
あぶらな科(帰)マメグンバイナズナ

1月展示植物

ロゼット状 アレチマツヨイグサ・コマツヨイグサ
きく科 ハハコグサ・チチコグサ・ヨモギ
ハルノノゲシ
きく科(帰) チチコグサモドキ・マメカミツレ
まめ科 カラスノエンドウ
しそ科 ホトケノザ
あかね科 キクムグラ
かたばみ科 アカカタバミ
なでしこ科 ハコベ
なでしこ科(帰)オランダミミナグサ

(湯浅 幸子)

行事報告

9/21(土)ワイヤード・レッスン 千石荘のバツタ
講師 岩崎 托氏
9/22(日)ワイヤード・レッスン 河口バードウォッチング
講師 飯田 政治氏
9/28(土)近木川源流探検
10/ 5(土)ワイヤード・レッスン 鳴く虫の声を聴く
講師 加納 康嗣氏
10/12(土)近木川河口の生き物
講師 山西 良平氏
10/19(土)ワイヤード・レッスン講座 カメムシ
講師 中谷 至伸氏
10/27(日)緑化フェア
11/10(日)ブナ林観察会
講師 田中 正視氏
11/23(土)近木川ウォーク
講師 中村 進氏
12/ 7(土)ワイヤード・レッスン 川原の礫
講師 岡田 宏氏
12/23(月)ゲリソカレッジ会員もちつき大会
1/ 6(月)春の七草摘み
講師 西村 静代氏
1/18(土)ワイヤード・レッスン講座 寄生蜂の話
講師 天満 和久氏

自然遊学館だより 1997冬 NO.11

編集 白木 江都子

発行者 上久保 文 貴

発行所 自然 遊学館

貝塚市二色3丁目26-1

休館日 毎週火曜日